

1. 水城の価値

水城跡は1350年前に築かれた人工構造物で、雄大な姿そのものを今に伝えている。ここに史跡としての大きな価値があるが、水城の価値はそれだけではない。築造経緯や利用のされ方など歴史背景が物語る水城の価値がある。また遺跡となった後、雄大な姿とともに歴史が語り継がれ、史跡の保存や顕彰が行われてきたことも魅力の一つとなっている。

本計画では、こうした水城跡の持つ多様な特徴を把握し、水城の有する4つの重要な価値を明確にする。さらに、これらの価値を構成する要素を分類し、これらの要素の適切な保存及び活用を前提とした整備活用計画の検討を行うものとする。

なお本章においては、こうした水城の変遷を鑑み、史跡として認識されるまでの期間を語る上で欠かすことのできない重要な価値については「水城としての価値」、また史跡となって以降の期間については、「水城跡としての価値」とし、総じて「水城の価値」としている。

(1) 歴史的な構造物としての価値

水城は、大野城や基肆城などと共に『日本書紀』に記述された、我が国の歴史を語る上でも重要な遺跡の一つである。663年、当時の日本が朝鮮半島の百濟国復興のために唐・新羅の連合軍と戦った白村江の敗戦を大きな契機として、その翌年に築造された。古代の大宰府を中心とする防衛施設の一つであり、「筑紫に大堤を築き水を貯へしむ。名づけて水城と曰ふ」という記述が示すように、水を貯えた他に類をみない巨大な土塁であった。

水城は、我が国が古代東アジアの国際情勢と深く関ったことを理解できる歴史的遺産であると同時に、今日までの間、その形状が大きく損なわれることなく保たれてきた巨大な構造物でもある。東の四王寺山、西の吉松丘陵に取り付き平野を遮断する土塁は、全長約1.2kmにも及ぶ。外敵からの脅威に備え、短期間で築造された長大な土塁はその歴史的な緊張感をも十分に伝えている。

水城本来の軍事機能は、後の蒙古襲来の際の防御線としても発揮されたが、通常は大宰府の内外を隔てる境界の地として機能した。さらに、土塁の大宰府側では条坊制に併せて南北の条里が成立するのに対し、福岡平野側では土塁に平行して条里が成立するなど、視覚的に理解できる土地区画の境界的役割も担った。

構造物としての水城は、大きく地表に姿を留める土塁、既に地下に埋没した濠や導水管として埋設された木樋、東西に置かれた門やそこを通過する官道、中央を貫流する御笠川などで構成される。

土塁は上下に分かれ、上部の上成土塁は褐色の粘質土と砂質土を交互に入れて突き固めた緻密なもので、版築工法によるものである。一方、下部の下成土塁の積土の単位は厚く、最下層付近には軟弱な地盤に対する積土の基礎強化を目的とした、枝葉を敷き詰めた敷粗朶工法がみられる。

濠は、土塁の前面（博多側）の外濠、後面（太宰府側）の内濠とから成る。外濠は、土塁に平行する形で幅約60mある。内濠は、土塁と平行する形で一部確認されているが、全体の規模は不明である。この内濠から取水して外濠へ水を流し込むため、導水管の機能を持つ木樋が下成土塁に埋設されている。土塁幅と同じく約80mの長さに亘る大規模なもので、複数箇所が存在している。板材を繋ぎ合わせるための加工方法や、大型の鉄製カスガイを使用するなど建築的技術がみられる。

水城の東西には門が置かれ、大宰府内外を往来する際の関門であった。水城が築かれて以後、大宰府の機能や時代の目的に併せて幾度か建替えられたが、特に西門には筑紫館（後の鴻臚館）から続く官道が敷設されていたことが分かっており、“大宰府の門”としての役割を担っていた。また、水城の中央を流れる御笠川については、貯水、あるいは交通機能を持っていたと考えられるが、具体的な構造については課題である。

水城は、現在の土木技術からみても極めて高い水準を持つ構造物である。そして、1350年の時を経た今日でも、遺跡として体感し、視覚的に理解できることが、この水城を語る上での大きな特質となっている。

(2) 大宰府都城としての価値

水城は、記録に残される国内最古の対外防衛施設であるが、単独で造られた施設ではない。『日本書紀』には水城築造の翌 665 年に大野城・基肆城が築かれたことを記し、また小水城群も大堤の西側の小谷を塞ぐように築かれている。これらは一体的なものともみられ、のちに水城背後の平野部に大宰府政庁・大宰府条坊、また観世音寺・大宰府学校院・筑前国分寺・国分瓦窯（現在の大宰府史跡）等が造られることで、今に知られる古代大宰府の姿となった。

『日本書紀』には、大野城・基肆城の築城に兵法に通じた百濟貴族の関与を記している。これは百濟の防衛思想及び構築技術が築城に深く関わったことを示すもので、あわせて水城や小水城群も百濟との直接的な関係性の中で築かれたものと推測されている。近年、水城の類似施設として知られる韓国の「扶余羅城」でも土塁版築、敷粗朶工法、外面の石貼りといった水城との共通要素をもつことが発掘調査で確認され、両者が近い関係にあることが認識されるようになった。この「扶余羅城」は、百濟最後の王都、扶余・泗泚城を守る全長 6km の城壁である。

泗泚城は、扶蘇山城を中心山城とし、その南麓に王宮が築かれた。都は王宮の南に広がり、西と南は白馬江（錦江）の河道によって、そして東は扶蘇山城の東門からのびる城壁「扶余羅城」によって囲まれている。さらにその周りにも山城が点在し、王都を守護している。この泗泚城の姿が大宰府の姿のもとになったという意見は古くからあり、鏡山猛はこれを「大宰府都城」と呼んだ¹⁾。水城・大野城・基肆城と大宰府政庁・条坊・観世音寺等とは造営時期が異なることも示されているが、最終的には一体的に機能したこれらの施設群は、東アジアの都城制に通じる、まさに古代都城と呼ぶにふさわしい姿といえる。

水城は、この大宰府都城の前面（大陸・玄界灘側）に設けられ城壁としての役割を果たした施設である。また大宰府への正面入口としての重要な役目もあり、外来者はここを通過して大宰府の各施設に向かった。とくに注目すべきは古代日本が外交使節来訪の窓口を大宰府と定めていたことで、水城は外国使節にとっても大宰府への入口となった。巨大構造物である水城と背後の大野城・基肆城を福岡平野から望む風景は、海外からの来訪者を迎えるとともに威圧し、ひいては日本の姿を知らしめる最初の舞台となったのである。

1) 鏡山猛『大宰府都城の研究』風間書房 1968 年

(3) 国内外との交流・往来の場としての価値

その築造経緯から、とりわけ防衛施設としての側面が強調される水城だが、文献史料にはむしろ出会いの場、別れの場、往来の場として登場し、それが語り継がれている。

最も有名なのは、大納言昇進のため帰京する大宰帥・大伴旅人と遊女児島との別れの舞台としての水城である。『万葉集』には、旅人卿を見送る多くの人々の中、二人の別れの場面が情景豊かに描かれている²⁾。大宰府に赴任する官人を迎えるのもこの水城であった。『小右記』には大弐・藤原高遠の赴任に際し水城で府官らの出迎えを受け、印とカギを受け取ったことが記される³⁾。大宰府へ左遷された菅原道真も水城から大宰府に入ったと推測され、水城を中心に伝承が数多く残されている。このほか『平家物語』にも安徳天皇を擁した平家の大宰府落ちの際「水城の戸」を書いており⁴⁾、大宰府から出る際のランドマークとして記された節がある。

また、水城西門を通る道は、大宰府政庁と筑紫館（鴻臚館）とを結ぶ官道だったことが発掘調査で判明した。筑紫館（鴻臚館）と西門はほぼ直線道路で結び、そのまま西門を通過して政庁前面の南北大路（推定朱雀大路）とつながっていると推測されている。近年、朱雀大路沿いで大型建物や高級食器類がまとまって出土し、外国使節を迎えた客館跡と推定された。これは水城西門を通るルートが大宰府外交にかかわる重要ルートだったことを改めて示すものである。上述のように都からの官人を水城で送迎した例を鑑みると、西門が、外国使節を出迎え・送り出す場であったことも想定される。

なお、水城は歌枕の地でもあった。平安後期の歌人・源俊頼は京にのぼるため舟で水城を出るときに和歌を詠み⁵⁾、鎌倉中期の歌人・藤原光俊は夕霧によって舟が通うことができないと詠んでいる⁶⁾。こうした和歌から水城を横切る御笠川に舟が通っていた風景を偲ぶことができる。御笠川と水城の接続については洗堰との説もあるが、付近では政庁にも使用された大宰府Ⅰ式鬼瓦が川底から出土し（太宰府市指定文化財）、塼敷きがあったとの言い伝えもある⁷⁾。和歌に詠まれた風景とあわせると、往来にかかわる門のような施設があったことも想定されよう。

2) 『万葉集』巻6 965-968 天平2年(730)12月とみられる。

3) 『小右記』。藤原高遠着任は、寛弘2年(1005)6月14日。

4) 『平家物語』寿永2年(1183) 平家大宰府落

5) 『詞枕名寄』巻35

「かきたへて みつきになりぬ これやさは 心つくしのかとてなるらん」 俊頼

「くもりなく すむとおもひし みつきより やみにまとひて たちかへりる」

右一首、筑紫にて舟よせ侍て後のほりけるに みつきと云所を出るとよめる

源俊頼(1055-1129)は、大納言・大宰帥源経信の子。

6) 『夫木和歌抄』巻21、雑部3(藤原光俊)

「夕霧や 立へたつらん いはかきの みつきの関に 舟もかよはず」光俊

藤原光俊(右大弁光俊朝臣)は、新古今和歌集以降鎌倉時代中期までの歌人(新三十六歌仙)

7) 『特別史跡水城跡 昭和54年度史跡環境整備事業実施報告書Ⅱ』昭和55年 福岡県教育委員会 p15

「(1973年)6月14日、道路公団から橋脚掘方内から大量の石が発見されたという通報を受けて視察したところ、橋脚(ピラー)P36-2に石敷状の遺構があることが確実となった。

(中略)この地域は、1970年以後の発掘調査では御笠川に接近しているため遺構は存在したとしても破壊されていると判断して調査をしていなかった。しかし地元の古老からの聞き取りによれば、明治年間の御笠川の河川改修の際に東堤と石堤を結ぶ線に“塼が敷き並べられていた”という言もあった。」

(4) 水城跡としての価値

664年に築造された水城が、防衛施設としての機能を最後に果たそうとしたのは元寇の時である。

『八幡愚童訓』には、文永11年(1274)10月に発生した文永の役の際、元軍の侵攻を支えきれないと見た鎌倉武士が「水木ノ城」に立て籠もろうとしたことが書かれており、「水木ノ城」が前は深田で道が一つしかないこと、山の高間に高い土手を築いていること、門があるが礎石のみになっていることを伝えている⁸⁾。門が失われていることからすると、古城として認識されていたようであるが、同じ記録には捕虜とした元軍の兵士120人を「水木ノ岸」に引き並べて首を斬ったと伝えている。その場所は、現在の水城西門北側と伝承され、地元の人々が近くに元兵を供養したと言われている。こうしたことは、水城は防衛施設としての機能はほぼ失っているが、大宰府と外の世界を区画するものとして機能・認識されていたことを示している。

これ以後、水城は防衛施設としての機能を完全に失い、水城跡として人々の記憶に残されていく。

文明12年(1480)、飯尾宗祇は大宰府から博多へむかう途中水城跡の傍らを通り、「横たわれる山の如し」と評したことが『筑紫道記』にみえる⁹⁾。江戸時代になると、貝原益軒や青柳種信は地誌編纂の中で水城跡を取り上げ¹⁰⁾、水城跡周辺の田や川から杉や檜の大材を掘り出されていることを伝える。また、1821年ごろに完成した『筑前名所図会』には、挿し絵入りで水城跡の堤と門礎が紹介されており、さいふまりの道すがらこの地域の名所として認識されていたことが分かる¹⁰⁾。江戸時代、水城跡周辺は耕地化が進み、明治期の地図に見るような田畑の中に浮かぶ水城跡の風景と、『筑前名所図会』の挿絵のような、木々に覆われた姿になっていたと思われる。

水城跡は次第に防衛施設としての機能を失い、木々に覆われ、田畑に周辺を埋め尽くされていく中であっても、本来持っていた歴史的な意義は決して忘れられてはいなかった。

宗祇の記した『筑紫道記』は、水城跡が天智天皇のころに築かれたものと口承されていることを伝え、江戸時代に編纂された『筑前国続風土記』の地誌も同様に認識されている。こうした水城跡の認識は、明治・大正時代以降になると調査・研究へと発展する。大正2年に行われた国鉄鹿児島本線拡張に伴う土塁掘削にともなって、九州帝国大学中山平次郎博士らが版築土層の状況や敷粗朶の観察などを行い、その後の調査研究の基礎となった。こうした調査研究の一方、地元でも大正4年に水城青年会により「水城大堤之碑」が建立され、水城顕彰のシンボルとして今も東門周辺に所在している。

水城跡は、大正10年に国史跡、昭和28年には特別史跡に指定され、文化財として保護が図られることとなった。また、昭和25年には大宰府県立自然公園に指定され、史跡を含む景観保持が図られている。しかし、木々に覆われ、周りを田畑に囲まれた水城跡の姿は、高度成長期を境に一変する。昭和40年代になると、水城跡周辺は一気に宅地化が進み、都市化していく中に土塁のみが孤立するようにそびえていた。昭和50年に行われた発掘調査により確認された幅約60mの外濠は、土塁のみならず周辺の保存の必要性を認識させた。また、高度成長期を境に、人々の生活における燃料は薪から化石燃料を使うように変わり、薪を採る焚きもの山としての役割は失われた。しかし、このことはかえって土塁上の樹木を大きく繁茂させ、良好な緑地空間として認識されるようになっていく。

8) 『八幡愚童訓』

「(前略) 武力難及ケレハ水木城引籠リ支テ見ント逃支度ヲコソ構ケレ。聞之コソ遅ケレ我先ニト落シカト、独モ戦者ナシ。
(中略) 水木城ト申ハ前深田ニテ路一ツアリ。後ハ野原広続テ水木多豊也。馬蹄飼場ヨリ兵糧淵屋アリ。左右山間州余町ヲ透シテ高クキヒシク築タリ。城戸口ニハ磐石門ヲ立タリ。今礎石計ニ成ニケリ。南ハ山ニ近テアヒ染川流タリ。右山腰ハ深ク堀ヲホリ、二三里廻レリ。(中略) 廿一日ノ朝 (中略) 異賊兵船無一艘皆々馳帰ケリ。(中略) 異賊船一艘志賀嶋懸テ逃ヤラテ有シニモ、余恐テ左右ナク向者コソ無リケレ。(中略) 当其時我モ我モト押寄テ高名ニソ生捕ケル。水木岸前双テ百廿人被切ケル。」

9) 飯尾宗祇 『筑紫道記』

「(前略) 越え過ぐるままに大成堤有。いはば横たはれる山のとし。尋れば是も天智天皇のつかせ給ひけるとなん、民の愁いかはかりかと思ふも悲し。(後略)」

10) 貝原益軒 『筑前国統風土記』 水城

「今其堤を見るに、高さ五間、根盤二十七間、東西に長き事八町許にして、其間たえて堤なき所一町許あり。堤の内は田と成て水をたくはへず。元禄十二年、此堤の辺の田をほりしに、大なる木二有て、掘出しける。長さ三間許、小口二尺餘あり。一本は杉、一本は朽て見分す。此土堤を築し時の台木なるへし。」

青柳種信 『筑前国統風土記拾遺』 水城附岩垣関

「元禄年中此辺の土中より大材を掘出せしよし本編に見へたり。近年も松杉檜等の大材を此川の辺より穿出せり。少も朽損なし。」

11) 奥村玉蘭 『筑前名所図会』 御笠郡水城

2. 水城の構成要素

本史跡は、遺構に代表される「水城の価値を知るための重要な要素」と「水城以外の要素」から成り立ち、さらにバッファエリア（緩衝地帯）として「水城の価値に影響している要素」と「水城の活用にも有効と考えられる要素」が取り巻いている。これらは一体となって史跡地を構成しており、本史跡の本質的な価値を明確にし、構成する要素を特定することが必要である。以下にそれぞれの要素を明記する。

なお、バッファエリアは、本計画の対象となる史跡指定拡張予定区域の周辺に広がる空間を示しており、良好な史跡地景観を将来に亘って担保していくために、本計画の中でその構成要素を明確にし、都市計画法や景観法との連携を図りながら、適切な景観誘導とまちづくりを推進していくエリアとして位置づけるものである。

表 3-1：水城の構成要素

水城の価値を知るための重要な要素
①水城としての重要な価値を示す要素
土塁（テラス、基底部を含む）
外濠、内濠
木樋
門跡
官道
礎石
建物跡
瓦窯
自然地形（東西丘陵部）
御笠川（水系）
②水城としての価値に付帯する要素
須恵器窯
経塚
水城以外の要素
③水城跡の保存・活用にとって有効と考えられる要素
水城院跡／思水園跡／高射砲台／戦車壕／緑地／植生（イチヨウ・サクラ・ヤブツバキ・コスモス・菜の花等） 水城大堤之碑／水田／広場／説明板／案内板／トイレ等の便益施設／素掘りの水路／溜枧／塞の神祠／薬師如来祠／ 父子島／ 水城駅築造時土取り跡／日田街道／JR沿い土層断面／新川運河／テラス上の通路 標識（内務省・文部省）／衣掛神社／衣掛石／姿見池／ひともっこ山（消失）／万葉歌碑
④地域の日常生活において必要と考えられる要素（水城跡の保存・活用にとって必要ではない要素を含む）
里道／JR線敷設による切通し／墓／電柱・電線等／道路／JR鹿児島本線／西鉄天神大牟田線／国道3号線／九州自動車道／河川

表 3-2：バッファエリアの要素

水城の価値に影響している要素
⑤他法令での保護措置や対応を検討する要素
二次林／水城院跡東からの眺望／道路／JR水城駅／JR鹿児島本線／西鉄天神大牟田線／河川／西鉄電車やJRからの水城跡風景
水城の活用にも有効と考えられる要素
⑥水城跡に対する理解を深めてくれる要素
周辺の文化遺産等